

<平成22年度学部附属共同研究報告>

基礎・基本の定着を図る個に応じた学習指導法の工夫

宇田廣文¹⁾・添田佳伸²⁾・藤井良宜²⁾・崎田茂樹³⁾・甲斐淳朗³⁾
堀真朋³⁾・小出純⁴⁾・河野和弘⁴⁾・島崎賢司⁴⁾

1 研究の目的

昨年度は研究テーマ「基礎・基本の定着を図る集団活動を取り入れた学習指導法の工夫」を柱にして、研究を進め、算数・数学科として、基礎・基本の定着を図ることをめざしてきた。小中の連携を図る手立てとして、教諭の乗り入れ授業の実践を年2回定期的に行っている。また、基礎・基本の定着を評価する手立てとして、算数・数学に関する基礎学力の調査を実施しており、その調査の結果を分析・考察し、実際の指導に生かせるようにした。さらに、大学の教員による学習指導要領改訂に関する講義を通して、「活用する力」について理解を深めることができた。

今年度は、昨年度までの研究を継続し、基礎・基本の定着を図る個に応じた学習指導法について研究を進めていく。そのために、6年間継続してデータを蓄積してきた計算技能調査を視点を絞って分析し、授業の改善に生かしていく。さらに、全体テーマである小中連携を図る手立てとして、毎年行ってきた乗り入れ授業の在り方を見直し、より効果的な授業を展開できるように工夫・改善を行っていく。

以上のことから、本主題を設定し研究に取り組んだ。

2 研究の概要

本年度の研究は大きく以下に分けられる。

① 乗り入れ授業

中学校の授業において、附属小学校教諭3名が補助に入る。その際に、小学校の視点からヒントカードやワークシートを作成し、個別に指導する。時期としては、4月当初に3回程度実施し、小学校でのつまづきを探るとともに、小学校算数から中学校数学へスムーズに移行することを目的とする。今年度は準備期間とし、来年度から取り組んでいく。また、小学校の授業において、附属中学校教諭が授業を行う。目的は小学生の実態を分析し、蓄積されたデータを活用し、中学校へ進学するまでに学習してほしい内容を意識付けする。今年度は、2月に島崎賢司が行う予定である。

¹⁾ 宮崎大学大学院教育学研究科

²⁾ 宮崎大学教育文化学部

³⁾ 宮崎大学教育文化学部附属小学校

⁴⁾ 宮崎大学教育文化学部附属中学校

② 計算技能調査

毎年継続して行っている調査で、今年度は12月に実施した。1月中にデータの集約を行い、正答率を提示し、考察とその後の指導を記録していく予定である。集約したデータの活用としては、落ち込み部分の補充を行ったり、次年度の授業に生かしたりしている。また、追跡調査を本年度より開始し、有効であった指導方法をデータとして残していくことにしている。

③ 大学教員による講義

大学教員による附属学校教諭に対する講義を毎年行っている。今年度は、10月に藤井良宜が行った。テーマは、「数学教育における数学的証拠の生成の必要性と今後の課題」であり、「教育における指導法は効果があったのかどうか」ということを、データを使って根拠を示す方法を考える研究であった。

3 研究の成果

研究計画に従い、順調に研究を遂行することができた。特に本年度は、小中連携に重点をおいて、今まで毎年行ってきた乗り入れ授業と計算技能調査について、内容や実施の方法を見直すことができた。乗り入れ授業については、中学校の授業において、入学してから早い段階で実施し、中1ギャップを軽減できるように計画した。その際、授業は附属中学校教諭が主に進めるが、附属小学校教諭は補助に入り、生徒のつまずきに対処するとともに、小学校での学習に生かしてもらうことを目的とした。計算技能調査においては、今年度から、生徒個人の追跡調査を行うことを決定し、より有意義なデータの収集ができると期待できる。

4 今後の課題

計算技能調査のデータ分析や附属中学校教諭による小学校での乗り入れ授業は、これからの取組であるが、確実に実施し、成果が期待されるものである。特に、乗り入れ授業においては、大学教員にも授業を参観してもらう。

今年度の研究は、内容を見直しスタートしたばかりのものや来年度へ向けての準備を行う年となった。来年度は、実際に乗り入れ授業を実施し、事後研究会をもつなどして成果を検証していく必要がある。計算技能調査においても、追跡調査を確実に実施していき、蓄積されたデータを生かした具体的な取組を考えていく必要がある。